

いつか
光は匂いて
KENZO KITAKATA
北方謙三

いつか
光は匂いて

北方謙三

いつか光は匂いて

1993年3月25日 第1刷発行

著者＝北方謙三



発行者＝野間佐和子

発行所＝株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-01

電話＝編集03-3947-2540 販売03-5395-3625 製作03-5395-3615

印刷所＝株式会社 東京印書館

製本所＝黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Kenzo KITAKATA, 1993 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、生活文化局あてにお願いします。

ISBN4-06-206362-X(生活)

いつか光は匂いて

CONTENTS

Fuji
猫と信夫翁

5

Australia
東の間の夏

33

PULAU SERIBU
グッド・ラック

59

MEXICO CANCUN
一月という男

85

PORTUGAL
ビバ・ポルトガル

111

PALAU
サザンクロス・バースデー

139

MOROCCO
冬のエッサウイラ

165

あとがき

189

SPECIAL THANKS TO

ミノルタ 日本航空 鶴エンタープライズ

THE FIJIAN AIR PACIFIC

株フェブライオ・エ・メッツオ

クイーンズランド州観光公社

シェラトン・ミラージュ・ポート・ダグラス

ホテル・ニッコー・メキシコ

ボルトガル政府観光局

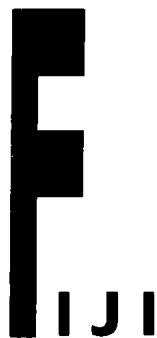
ヴァージン・アトランティック航空

ホテル・ニッコー・パラオ

ロイヤル・エア・モロッコ

装幀・成田郁弘

デザイン・デザインファクトリー・I・N
カバー写真・宅間國博



あほうどり
猫と信天翁

都会の喧噪を逃れるためにやってきた熱帯の海。
「フリート・レディ」で魚を追う日が続く。

猫と信天翁

あほうどり

島ひとつが、ホテルになっていた。

本島との間は一本の橋で繋がっていて、その間はささやかな海峡と言ってもよく、事実、潮の満ちた時間には水深が三メートルに達し、流れも強いのだった。夜、強力なライトを頼りにボートでそこを渡ると、澄んだ緑色の水が底まで透けて見え、時には小魚の群れが光に誘われて集まってきたりもした。

ボートを漕ぐのは大抵ウシヤの役目で、ウシヤの手が塞がっている時は、アジューをはじめとする少年たちがそれに代った。オールなどという洒落たもので漕ぐのではなく、棒つきれで水面を掻き回すだけだから、狭い海峡を渡るのにかなりの時間を要した。ライトを持っているのが、私の役目だった。時として水の底を照らしてしまう私を、ウシヤはかわいい声で叱ったが、少年たちは前方に闇が待ち構えているように、いっこうに気にしなかった。ボート

のそばに寄ってきた魚を、アジューが、猫さながらの素速さで掴みあげたこともあった。

ボートを降りると、私は十分ほど歩いて部屋へ帰った。はじめは光のない砂浜で、立ち止まると海鳴りがよく聞えた。私が砂浜を歩ききる間には、ウシヤのボートの明りはまだむこう岸についていなくて、やがて私は照明のあるホテルの庭に入り、ウシヤの明りを見失ってしまうのだった。その砂浜を歩くのが、私は好きだった。昼間は、ウインドサーフィンが並べられていたり、貝細工を売るビレッジの女たちがいたりするのだが、陽が落ちると恋人たちもやってこない。闇の中で、波の音がただ懐しかった。

部屋へ戻ると、私は白いシャツと白いズボンに着替えて、ホテルのレストランへ出かけていく。顔馴染みになった二、三人のボーイと握手をし、窓際の、小さなテーブルの席に着く。ボーイたちは、決して今朝の釣果を訊いてきたりはしない。訊かれて私が不機嫌になつてから、キャプテン・ルパニカクルーのジョーに訊くのだ。釣れたらおめでとうと言おうと、待ち構えていることはわかった。

早朝、夜が明けきらないうちに、船を出す。その生活が、すでに一週間続いていた。私が狙ったものは、かかっていない。したがって、正午近くにホテルの棧橋に戻ってくる船は、どんな旗も掲げていなかった。釣果を旗で示すのが、やり方だった。私は毎朝出かけていくわけでなく、夜の天候と潮の具合を見て船を出すので、もっと明るくなつてからホ

テルの別の泊り客が船を出すこともあった。そういう時、白とブルーの二色の旗をいくつか掲げている。バラクーダであろうが、ダムダムであろうが、たとえ小さなスナッパーでも、釣れた数だけジョーは旗を掲げてしまうのだ。

白い旗。新しい記録を示すその旗が、掲げられているのを、私はまだ見ていない。

白い旗を、アウトリガーに自分が掲げる、というほどの気負いもなかった。ただ待っていた。ジョーがいやがっても、一番大きなフィッシングフックを使い、生の魚を餌にするのだ。『フリート・レディ』に備えてある擬餌は、虹色の烏賊の恰好をしていて、それを放りこむ時、ジョーはちよつといとおしそうな仕草でキスをする。前歯の抜けてしまった唇を突き出すジョーの姿が、いかにも魚を呼びそうで私は好きだったが、いつの間にかジョーとの意地の張り合いのようになっていた。

ジョーは、いつまで経っても、小説家という私の職業を理解しようとしなかった。ほんとうの仕事を教えてくれと、ポイントにむかう間ファイティングチェアに腰を降ろしている私の背中に、さも意地悪でもされているような声で、ボソボソと言うのだった。

アジューが小魚をぶらさげてやってきたのは、雨の日の午後、私が『ラグリーンテラス』で粒胡椒をたつぷりとまぶしたサワラのグリエの、最後のひと口を頬張ろうとしていた時だ。サワラは、鱈と書くにはあまりに大きすぎる。味も大味だが、焼いて粒胡椒をまぶす

と、不思議に合うのだ。ヘミングウェイが粒胡椒を好きだったと教えてくれたのは、キューバのコヒマルという漁村でまだ生きている、ヘミングウェイの船の船長をしていたという老人だった。

それ以来、私は時々ヘミングウェイの真似をしてみる。真似をしてみるのは粒胡椒ぐらいで、口の中でそれがプチプチと潰れていく感触は好きになったが、それ以上真似をしようとは思わなかった。

釣りと酒の日々を送りながら、ヘミングウェイは、カリブ海やメキシコ湾の海に、疲れきった自分の姿を映していたのだ、と私は思っている。肉体が疲れきっていたわけではない。頑健な肉体のまま、作家として疲れきってしまったのだ。熱帯の海にじっとむかい合うことによって、彼は『老人と海』を生んだが、それは彼の作品系列の中では、凄惨な自己格闘の産物とみなされているし、それを考えずに読んだとしても、作家が燃やし得る最後の炎だったと言うしかない傑作だった。その後の彼の作品は、ほとんど未完と言っているものばかりである。

私は、疲れた小説家の心を映すために、熱帯の海に来ているのでもなければ、巨大魚と格闘する意欲に満ちているわけでもなかった。年に何度か都会の喧噪を逃れたい願望があったし、春さきにはアレルギーで悩まされもするのだ。その両方を解決する方法として、

熱帯の海は考えられるかぎり最上の場所だった。

食後のコーヒを口に運びながら、私は小魚をぶら下げたアジューを無視し、ひどくなりそうな雨に眼をむけていた。小柄で十歳そこそこに見えるが、実は十四歳で、抜目のないところも充分に持っている。油断すると、腐りかかった小魚を買わされたりするのだ。

「この間のスナッパはどうした？」

声も子供のようだが、表情はひどく大人っぽい。インド系特有の、影りの深い痩せた顔だった。

「あれは、ここのシェフに料理して貰った。半分はフレッシュで、半分はグリエさ」

「底釣りで、あんなスナッパがあがることなんて、滅多にないんだよ」

鯛に似た魚だった。あげた魚を食べたいと言えば、シェフはどうにでも料理してくれる。刺身の造り方も心得ているようだが、熱帯の魚は大抵大味で、脂が少ないのだった。グリエにして、黒胡椒で食う方がいける。

「午後から、なにするんだい、ケインさん？」

アジューは、自分のことをどんな場合でもミーと言う。ミー・ゴー、ミー・カムという具合だ。姉のウシャの英語はもっとひどかった。それでも、その気になれば通じる。

「スバへ車を飛ばしていく。新しいロールと水中ライトを買ってくるんだ」

FIJI



アジューが水中ライトをひどく欲しがっていたことを、私は知っていた。

「おまえ、今朝、浜で殴り合いをしてたな」

私は、アジューの細い首に巻きついて、さらに大きく見えるダイバーズウォッチに眼をやって言った。ダイバーが忘れていったか水中に落としたものを、アジューが見つけたらしい。少年たちの間で、それについて揉め事が起きていることを、私は知っていた。

「ひどくやられてたじゃないか。あれはおまえと同じ歳のやつだろう」

軀の大きさはずいぶん違って、大人が子供をぶん殴っているように見えた。アジューは泣いて逃げたが、時計だけは手放さなかったようだ。姉のウシヤは十八で、大柄な女だった。姉弟でなぜこれほど骨格が違うのか、と思えるほど二人の軀は違う。

それ以上アジューを相手にせず、私は部屋に戻った。雨の日は蒸暑かったが、部屋は適度に冷房が効いていて快かった。

二時半まで昼寝をした時、メイドのルイザがノックして入ってきた。ルイザは私の部屋の係で、パートタイムのベビーシッターもホテルでやっている。中年を過ぎたフイジの女のほとんどがそうのように、かなり肥っていて、そして陽気だった。毎日二時過ぎに、私の部屋のテーブルの花瓶に、自分で切ってきた花を数本さしてくれるのだった。

「雨はまだひどいかな、ルイザ？」

「あら、船が出ていったんで、ミスター・ケインかと思いましたよ」

こんな日に、船を出す客もいる。釣りはおまけのようなもので、クルージングを体験したいのだ。そんな客の時も、キャプテン・ルパニは、律儀に鳥の姿を求めて走り回る。

魚群探知機を備えた日本のクルーザーより、海上の鳥の群れを捜すルパニの漁法が、私は好きだった。がっしりした肩と、彫りの深い顔と、知的な眼ざしを持ったハンサムな男だった。女にもてるだろうと私が言うのと、女房ひとりで沢山だと笑って私の肩を大きな手で叩いた。ルパニは、私がひとつ覚えの自分の釣りを押し通そうとしても、それでいいのだとしか言わない。そのくせ釣果がないと、悪かったと悲しそうな眼をして言うのだ。その眼を見るたびに、ほんのちよつとの間だけ、私はジョーの擬餌ルパニを使ってもいいという気になった。

「スバまで行ってくるよ、ルイザ」

「雨はもうやんだけど、道に水が溢れているところもありますよ、ミスター・ケイン」

「水を跳ね飛ばしながら走るのも、面白いもんさ」

「スバで、女の子の服でも買うんですね」

「俺がビレッズの女の子と仲よくしてることを、みんな知ってるのかい？」

「そりやね。毎日のように、あの娘がボートを漕いでくるじゃないですか」

ウシヤに会いに行っているのか、本職の漁師である親父に、潮や風の具合や仕掛けを教
えて貰いに行っているのか、自分でもわからなくなっていた。はじめは、アジューが親父
のところへ連れていったのだ。親父はほとんど英語を喋らず、フィジー語と身ぶりでの
あたりのポイントでどういう仕掛けを使えばいいか、根気よく教えてくれた。行くなびに、
私は胡椒の根を粉にしたものを、ひと袋持っていく。親父はそれを布に入れて水を注ぎ、
プラスチックの洗面器の中に灰褐色の液体を搾り出すのだった。話している間、それをカ
ップで掬っては洗面器に落としこみ、時々口に運んだ。せいぜいひと袋五十セントくらい
のものだが、飲み終った時、親父はすっかり酔っ払ったようになっていて、時には酈いびきをか
いて眠ってしまうのだった。

夕方、私はホテルのある島の、突端の砂浜に立って手を振る。アジューはよくそれを見
落とすが、ウシヤは決して見落とさなかった。

ホテルの売店で、黒い肌に似合いそうな口紅を買って持っていた。いまのところ、ウ
シヤへのプレゼントはそれだけだ。ウシヤは夜私を送る時になると、それをつけている。
ライトで照らすと、恥しそうに下をむいた。

スバまで、二時間ほどの道のりだが、雨あがりの道は三時間かかった。ほとんどが単調